

一、北海道教育視察所感

部長 教授 小林 照朗

一、記事

一、會計通信

一、會員ノ異動

一、會計報告ノ目

一、雜著

一、雑誌ノ懸案

一、圖書整理ニ関スル報告

一、印刷ノ進捗ニ関スル報告

一、印刷ノ進捗

一、印刷ノ進捗

目次

技藝科學術談話會々報 第三號

胎 教

教授 文學士 下 田 次 郎

今から二千餘年の昔、西洋にスバルタと云ふ所がありました。此のスバルタと云ふ所では立派なる兒を擧げやうと云ふ目的から、結婚を致します時には大層喧ましいのでありました。

それで結婚には先づ男女とも立派なる身體を有する者を選んだのであります、恠る身體を有して居らない者は、結婚が出来ないと云ふ有様であります。かくて結婚して、婦人の胎内より生れさせた赤兒は調べる役人が居りまして、其の役人の前へ、赤兒を持出して調べて貰ひます、而して役人が此の赤兒なれば、他日立派な國民になるだらうと云ふ鑑定を與へたものは、直ちに取上げますが、どうもこんな赤兒は生きて居つても見込がないと云ふ鑑定をつけられたものは慘酷にも谷に捨てたり杯致しまして、最初から取上げませなんだ。

今日は人道と云ふものがございますから、總て人間と云ふ以上は誰れでも生存の權利を有つて居るのであります。生れたばかりの赤兒でも、權利を有つて居りますから、昔のやうな譯には參りませぬ、それ故に今日は身體の悪い兒でも善い兒でも悉く養育して居ります。我が日本國にも身體の悪い兒は生れないで善い兒ばかり生れるやうになりましたならば、實に幸福であると思ひます。



雑誌の題名

一、記事

一、會計通信

一、會員ノ異動

一、會計報告ノ目

一、雑誌

一、雑誌の懸案

一、圖書雑誌ニ對シテ

一、雑誌の發行

一、雑誌の編輯

一、雑誌の印刷

目次

雑誌の題名

技藝科學術談話會々報 第三號

胎教

教授 文學士

下田次郎

今から二千餘年の昔、西洋にスバルタと云ふ所がありました。此のスバルタと云ふ所では立派な

る兒を擧げやうと云ふ目的から、結婚を致します時には大層喧ましいのであります。

それで結婚には先づ男女とも立派なる身體を有する者を選んだのであります、恠る身體を有して

居らない者は、結婚が出来ないと云ふ有様であります。かくて結婚して、婦人の胎内より生れま

した赤兒は調べる役人が居りまして、其の役人の前へ、赤兒を持出して調べて貰ひます、而して

役人が此の赤兒なれば、他日立派な國民になるだらうと云ふ鑑定を與へたものは、直ちに取上げ



勿論子供が他日國家社會を形勢する要素である以上は、弱い子が生まれますと云ふと、生涯人の世話を受けねばならぬから、國家に取つては多大の不利益であることは申すまでもありません。故に國家の爲め社會の爲め成るべく弱い兒は生れないやうにしたいものであります。健心は健身に宿るといふ語のある通り、身體が立派であれば、自ら精神も立派になる傾があります。その點からも、結婚は大切なことで父母たる者の身體が立派でなければなりません。結婚の御話は是れだけに致して置きます。

次には少しく兒の胎内に居る時の母の心得に付て申上げやうと思ひます。之は支那では胎教と申しまして昔からあつたことであります。例へば聖人と言はれました文王の母なる人は、其の文王が胎内に宿りましたからは、眼には不正のものは見ない、耳には正しい聲でなくては聞かない、又食物は邪味は食べない、そして常に端座して聖賢の教へを守り、又種々聖賢の書かれた書物を讀んで居ると云ふやうに、非常に立派なる生活をなされたから、其の生れた所の兒は、聖人とも人に言はれた文王であつたとなつて居ります。之は名高い話でありまして、小學と云ふ本の中にも出て居ります。

西洋に於ても、昔から胎教と云ふことは申して居ります。今から二千餘年の昔、希臘にアテネと云ふ都がありました。大層立派なる町で風景も宜しいのであります。又道路建物杯も實に立派でありまして、大理石の丸柱が何本も立つて居るとか、又大理石の彫刻が欄間に鏤めてあるとか、道側に飾つてあるとか、兎に角立派な都なのであります。此の都で生活する婦人は見るところのものが皆美しいところから、其の生れた兒が美しかつたと云ふことを、書いて居る人もあります。又た原胤昭氏の調べられた結果に依りまして、同じ兄弟姉妹でありながら、雪と墨ほど違ふのがあるさうであります。兄の方は法律上の犯罪で度々牢獄に入つたりなどした處が同じ親から出た弟の方は立派な人となつて、世の中に其の名が聞へて居る、又姉妹でも、姉の方は實に不良で人の前に顔出しも出来ないと言ふ不行跡なのに、同じ親から出た妹の方は、品行方正な立派な人であると云ふやうに、同じ兄弟同じ姉妹でありながら雪と墨、鳶と鷺ほど違ふのがあるさうです。

それで、世間では、どう云ふ譯で、同じ兄弟姉妹でありながら、ア、も違ふものかと云つて怪んで居ります。が之は要するに母の胎内に兒が居ります時の、良人の生活状態の如何、又母なる人の精神の如何と云ふものが、胎兒に響いて、而して善い者ともなり悪い者ともなるのであります。それで御婦人方は、生れてから後子を能く教育しやうと云ふことを考へるよりも、先づ第一に兒が胎内にある時の事を考へねばなりません。即ち妊娠の時には心を安靜に保つて正しく而て、生活しやうと云ふことを、御婦人方は心掛けねばならぬと思ひます。こんな例を申上げますと



澤山ありまするが、二、三の御話を致します。

四

此の頃我國でも西洋音楽家のモツアルトと云ふ名を御聞きでありませう、此の人は第一流の音楽家であります、其のモツアルトが、未だ母の胎内に居りました時に、非常に母が音楽に耽つて居つたと云ふことであります、果して生れた所の兒は、樂聖とも言はれたるほどのモツアルトでありました。處が二番目に生れた兒は、一向音楽の才がない。ところが此の二番目の兒が胎内にあつた時は、母が音楽を致さなんだと云ふことであります。

佛蘭西に名高い音楽家でグーノーと云ふ人が居りました。此人の母は、乳を吞ませながら、何時でも唱歌を誦つたさうであります、それでグーノーは自分は母の乳を吸ふと共に、音楽を吸ふたのであると申して居ります。

獨逸に名高い小説家で Hoffman と云ふ人があります、此の人が一つの小説を書いて居ります、或る所に珠玉を鑲めた指輪であるとか、或は又首飾りであるとか、結構な裝飾品を造る鑄師がありました。斯の道の技に掛けては、此人の右に出るものはないと云ふ位の名人であります。それであるから、貴婦人達が澤山注文をします、處が不思議な事には、注文された品物が出來上つて依頼者の手に渡りますと、其の持主が殺されるとか、或はまた盗まれる、どうも不思議なことがあるものだと云ふので遂に之が問題となつた。一體之は何者の仕業であらうかと云ふので、警察は

いろいろ探偵致しましたがどうも分らない、様々苦心の結果、遂に其の犯人を捕へることが出來ました、豈計らんや犯人は鑄師の本人でありました、それで段々此の者を取調べまして、其の事情を聞いて見ると、此の男の母が、此の男の胎内にある時、或る貴婦人の美しい飾をして居るのを見て、あれが欲しい、あの飾が欲しいと思ふたことがある。

それが胖兒に響ひて居た者と見へて、飾さへ見ると云ふと欲しくて堪らない、自分の造つた飾を附けて居る人を見ると、殺しても取らうと云ふ風になつたと云ふことであります。是は小説でありますが、如何に母の氣分が胎兒に移るかと思つて申したのであります。

勿論人間と云ふものは、一生立派な生活をしないでなりませぬが殊に子が腹に居る二百八十日間と云ふものは、生れた後の兒の生涯の爲めであると考へて、正しく考へ正しく行ひ、身體精神を安靜に保つと云ふことが、甚だ大切なることであります。二百八十日間と云ふものは、極めて短日月のやうでありますけれども生涯数十年間の如何なる時期よりも大切なものであると心得て妊娠して居る婦人本人は勿論であります、家庭の良人舅姑は成るべく妊婦にやさしくして悪いことを見聞させないやうに、又悲しく情けなく思はせないやうに、何時も愉快に嬉しく、そして正しく生活するやうに皆んなが努めなければなりません。一體感情と云ふものは、非常に身體に徹へるものであります、例を擧げて申しますると、嬉しい時には、血液の循環がよくなつて皮膚



に來て居る血管にも血がよく廻りますから、皮膚の色が艶々として赤くなります。又呼吸もはずんで來て、酸素を餘計に吸収しますから、從て元氣が出て、筋肉の力も増し、食慾も進みます。それで嬉しいと云ふことは、總て身體に宜しいのであります。之に反しまして惱みは、身體に悪いのであります、呼吸も弱り、筋肉の力もなくなり食慾も衰へます、又血管を收縮致しますから顔色が悪く青くなります、頬は窪み、歩むのも懶く、前に屈んで歩むと云ふやうになります、是は惱みが身體に及ぼす影響であります、而して唾を出す腺が分泌を盛んにしますから、口に泡を吐きます、食慾も衰へると云ふやうになるのであります。又驚きますと一時心臟が止ることがあり呼吸をも妨げ、身體が顛へ、血液の循環が悪くなつて、所謂冷汗が出ます、又下痢を催すことでもあります。斯様に感情と云ふものは、身體に響くのであります、殊に兒が胎内にある時は、感情が高まり、物に激し易いのであります。そしてそれが體中何處に一番響くかと云ふと、呼吸でもなし、血液の循環でもなし、食慾でもありません、兒の宿つて居る部分に一番響くのであります。それで兒が胎内にある時は、成るべく感情を激させないやうに、ハラ／＼思はせないやうに、極めて心を靜穩に保たせると云ふことが、肝要であります、さうしますれば、實に正順な、精神のスムーズとした兒が生れるだらうと思ひます。二百八十日間と云へば極めて短日月でありますから、胎兒が生れてから、生涯のため、胎兒に悪い影響を及ぼさないやうに、善い影響を及ぼすや

うに、妊婦、本人は勿論、一家舉つて努めなければならぬのであります。數十年教養の苦辛から見れば、二百八十日の注意は非常に安價で、そしてその結果は前者よりも貴いのであります。今から丁度四十年前に、獨逸と佛蘭西が戦争を致しました。其の戦争で今日獨逸の領分となつて居るストラスブルグと云ふ市が獨逸の軍隊に圍まれた時に、圍まれた佛蘭西人の中には、聲の啞れた人、聲の出なくなつた人、血を吐いた人もあり、又病氣の人は一層重くなつたさうであります、要するに之は心配の結果であります。支那にも斯う云ふ例があります、或る人が高い門の額に、筆を振ひまして後、書落したところがあつたのを、降りてから氣が附きましたから大層驚いて、又書く爲めに上つて行きました、處が降りて來た時には、其の人の髪の毛が白くなつて居たと云ふことであります、兎に角心配と云ふことは髪にも影響するものであります。獨り人間ばかりではありませぬ、動物にも感情と云ふものは身體に響き易いのであります、乳を取る牝牛を飼育致しますには、極めて安靜にしなければならぬさうであります、汽車の音で驚くとか、何か驚くとか云ふことのないやうに注意を致しませぬと、乳が止るとか又は乳の質が悪くなつたりするさうです。人間は動物に比較しますると、感情の影響は尙ほ一層強いのであります、例へば乳母を雇ひますにも、田舎から出て來て、見ず識らずの人の家に來ると、始めはサツパリ様子が分らない、家内の人の心も分らない、それが爲めにいろ／＼心配をします、さうすると來た時は澤



山に出た乳も、出が悪くなり、又は全く出なくなると云ふことがあります、是は乳母が心配した結果であります。獨り乳母ばかりではありません、生みの母の乳の出る出ないと云ふことは、餘程心配と云ふことと關係があります。姑が御機嫌が悪るいがどうしたものであらう杯と、いろいろ心配を致しますと出る乳も、一滴も出ないやうなことがあります、又心配氣苦勞なくして、心を靜穩に持つて居つたならば、或は今まで出なかつた人でも出るやうになるかも知れないと思ひます。能く世間には醫師にかけて、母の乳の出ない譯を、いろ／＼と尋ねる人がありますが、私の考へでは、それはもう末のことであると思ひます。先づ醫師に尋ねる前に、何か心配なことでもあるのではないかと云ふことを考へなければならぬと私は思ふ。姑もそこへ先づ氣付いて、産婦をば特にやさしく親切にせねばなりません。母の乳の出ると云ふことは、自身の幸福のみならず、大層兒の幸福であります、牛乳であらうが乳母の乳であらうが、逆も良い母の乳には叶ひませぬ、母の乳の出ると云ふことは、目出度いことでもあります。それには今申すやうに平和なる生活をすることでもあります。良人は妻の胎内に兒の居る時には、他所へ行つても早く歸つて安心をさせるとか、或は成るべく他所へ行かないやうにするとかせねばなりません、姑は姑でよくやさしくするといふやうに、妊婦の氣を安らかにせねばなりません、妻は妻で、無論自分のする仕事がありますから出来るだけ働かねばなりません、胎内に兒が居る時だけは、それもほど／＼に控え

なければなりません。出來の悪い兒は、どんなに教育しても先づ駄目であり、教育されるべきものの地質を、先づ良くしておかねばなりません。それはよく生みつけることでもあります。以上述べましたことは婦人に取つては非常に大切なことであります。此の胎教のことは之れ丈けに致して置きますが、要するに胎教と云ふことは學校の教育以上に價值があると云ふことを申上たのであります。そこで二百八十日間經つて兒が生れます、母は兒が生れますと、自分は第二として、兒の爲めに全力を盡すものであります、私の教へて居ります或る一人の生徒の母親は、神様に斯う云ふことを願つて居るさうであります、若し子に災難が降掛つて來るやうなことがあるならば、其の災難が私に掛るやうにと願つて居るさうであります。母は子のために一生懸命であります。人間の善くなる善ならぬと云ふことは、即ち母の如何にあります、三歳兒の魂百までと云ふことを申しますが、其の魂を入れるものは母であります。子が生れて始めて接する人が、母であるといふこと、慈悲愛情の魂が母であるといふことは、人間に取つては目出度いことでもあります。又人物の傳記を読みますと、豪い人物は大抵立派な母を持つて居るやうであります。例へば孟子の母の如きは、よく人の知れる賢母であります。或る時隣で肉を屠つて居つた時に、此肉はどうするのかと云つて、孟子が母に聞きました、さうすると母は、之はお前に食べさせるのだと云ひました、孟子の家は貧亡でありますから、逆も肉杯を買つて、孟子に食べさせると云ふことは出



來ないのですが、一旦ア、言つたものだからと云つて、遂に母が工面をして其肉を買うて食べさせたと云ふこととあります。斯の如き賢母でありますから、果して其の兒は孟子とも人に言はれるほどの豪い人になつたのであります。

私の教へて居る或る生徒の一人に、斯う云ふことを言つた者があります。私は學校の試験と云ふものを少しも苦にはしませぬが、一つの心配と申しますのは、私が夜寝ずに勉強しますと、お母さんもやつぱり寝ずに起きて居られます。私は一人で勉強致しますから何卒お休み下さいと申しましても、氣に懸るからと仰しやつて、どうしても寝て下さいませぬ、之が試験の時私には心苦しいのでございますが、どうかしやうがございませぬかと云つたことがありました、此の位に母親と云ふものは兒の爲めを念ふものであります。

母は子の第一教育者でありますから母は子の前では、一言一行を謹しまなければなりません、或る學校で、先生が女子の生徒に向つて、將來何んな婦人になつて見たいか、各は望みの者を書いて見よと云はれました。そこで各々望みの人を書いて出した、其の中の生徒の壹人、之は豪家の娘であります、其の生徒が髪結ひになりたいと書いて先生に出した。すると其の日の午後娘の母親が、青い顔をして學校に参りまして、家の娘は馬鹿でございませぬ、今日先生から何に成りたいかと聞かれましたら、私は髪結ひになりたいと書きましたと、得意になつて申すのです、私は餘

り残念でございませぬから、娘を叱り、その事を申しに参りました、私共は決してそんな育て方は致しませぬと申しました、そこで先生がどうも之れには譯があるに違ひないと思ひましたから娘さんが髪結ひになりたいと云ふことを云はれるに付て、思ひ當ることはありませぬかと聞きましたところが、始めの間は別にありませぬと答へて居りましたが、再三先生が聞きましたら、それならば斯う云ふことがありました、私の處に髪結ひに來る女があります、時々私が髪結ひと云ふものは、中々いい賃錢を取るものであるから、婦人の仕事としては宜いものであると云ふことを申したことがあります、母親が言ひました、そこで先生が成程それでよく解りました、之は娘さんの罪ではありませぬ、詰りあなたの責任であるから決して娘さんも叱つてはいけません、始終あなたがさう云ふことを仰しやるから子供心にも髪結ひは好いものであると云ふことが頭にあつたから、娘さんも髪結ひになりたいと言つたのでせう、それですから、子供の前では一言一行謹しまなければなりませんと先生から言はれました。そこで母親も成程と思つて歸りまして、其の後は娘については何事も先生に相談したと云ふことであります。

それで子供はどんなことを見て居るか、聞いて居るか知れませぬから、親たるものは常に注意して正しく言ひ正しく行ふやうにしなければなりません。

これも私の生徒の書いた話であります、或る學校の女の先生のお母さんに、大層佛を信する人



があります、或る時京都で宿替へをすると云ふので、スツカリ荷物を片付けた後、未だ少し暇があるから何處かへ母は出て行かれました、其の後で女の先生も用があつたと見へて、家を明けて出ました、其の留守に盗賊が入りまして、片付けて置いた荷物を盗んで行つて仕舞いました、其の後へ女の先生が歸つて来て、此有様を見て大層驚きました、何んと言つてお母さんに御記をしたものであらう、實に申譯がないと云つて、獨り胸を痛めて居りました、處へお母さんが歸つて來られて、どうしたのかと聞かれたから、實は泥棒が入つて荷物を盗んで行かれました、之は私の不注意でございましたと云つて只管謝罪しました、それを聞いたお母さんは怒られると思ひの外、マア宜つたマア宜かつたと云つて、却て喜ばれました。そこで娘も不思議に思つて、尋ねましたら、お母さんが言はれるのに、若し之がお前が賊をしたと云ふのなら、私は生きて居られないが、マア盗だのなくて、盗まれたので宜かつた。それにつけても泥棒のお母さんは、氣の毒なものであると云はれましたといふことであります。

斯の如き心掛けの母は善い子を作りますが、此の反對の心掛けの女は悪い人を作ります、濁つて居れば、其の川は清い譯には往かないのであります、母が清くなれば、兒も清くなるのであります。一體婦人と云ふものは生れながらにして、母と云ふ性質を有して居ります、男の方は木の馬に乗るとか、竹馬に乗るとか、總て遊びが粗暴であります、女の方は人形を抱へて母親の眞似を

すると云ふやうに、小さい時から母となるべき土台が出来て居るのであります。

ナポレオンは、佛國の母を良くせよ、されば其の兒は良くなるべしと言ひました。それでナポレオンは戦争をするも第一に敵國の婦人の性質を調べたといふことであります、兵士の力は分らないでも、婦人にして愛國の念の強いものであり、良き母でありましたらば、その勝敗は分るでありません。

將來世界各國とも益々競争が盛んになりますが、それは男子の競争のみならず、又婦人の競争なのでありますから、兒を生み、又之を育つる母の責任は重いのであります、日本は近き數十年の間に歴史に例のない發展を致しましたが、中々之から先きが骨が折れます、如何に國が富み如何に産物が豊になつても人民が立派でなかつたならば、要するに是等のものは役に立たぬのであります。その立派な人を作り上げる元は婦人であり、母でありますから、國家に對する責任は實に大なるものであります。服装の美に苦心する杯と云ふことは、婦人の任務から考へれば、何でもないことであります、根本の問題は如何なる兒を生み、如何に之を育つべきかと云ふことであります、女子教育の必要な、亦ここにあるのであります、どうか此の覺悟を御持ちになりまして、會員の方は勿論會員を通じて、日本全國の婦人が、婦人として、又母として實に申分のない立派なものであると云ふやうになりたいと思ふのであります。